向日葵だより
黒沼共同会計事務所
Kuronuma Accounting Office
あなたの快経パートナー
第３２３号
2024年8月10日発行

「パリは燃えているか」

先月の24日からの48時間に降った雨量は、酒田市・新庄市など県内各地で観測史上1位を記録。線状降水帯も発生するなど、これまでに経験したことのない記録的な大雨になりました。被災された方々には心よりお見舞い申し上げます。

さて、7月26日から8月11日まで、第33回オリンピック競技がフランス・パリを中心に開催されています。パリで開催されるのは1900年、1924年に続き3回目。今回の大会では、32競技329種目が実施され、開会式はパリ中心部を流れるセーヌ川が舞台と話題も豊富です。そして、この時機に読売新聞のコラム「編集手帳」に興味ある記事がありました。

スポーツの名句に「重要なのは、勝つことでなく参加することだ」がある。1908年ロンドン五輪の米英対立に由来する◆当時、団体戦に綱引きがあった。靴底にスパイクを付けた英国に、運動靴で敗れた米国はルール違反だと猛抗議した。聖職者が険悪な仲を戒めた苦肉の説教は、のちに五輪を象徴する至言となる。騒動の背景には、新旧の大国同士のさや当てがあったという。◆…国家対立と戦禍に揺さぶられながら、五輪は130年の歴史を育んできた。国も宗教も人種も超え、たたえあうアスリートの姿に、人は平和という理想を重ねる…◆近代五輪の父、パリ出身のクーベルタン男爵は冒頭の言を引き、人生で重要なのは、成功でなく努力だ「」と補っている。肉体を研ぎすました者の汗が、メダルより光って見える夏が始まった。

今年の開催地パリには、歴史的建造物にまつわる様々なエピソードが残っていますが、先日NHKドキュメンタリー「エッフェル塔に恋して　花の都　100年の物語」が、オリンピックを記念して放送されました。パリのシンボルともいえるエッフェル塔は、その美しいたたずまいから世界中の人々に愛されていますが、その誕生までには幾度もの危機があったようです。世界一の鉄塔を立てるのは難工事の連続。さらに美的景観も損なわれると芸術家たちが塔の建設に猛反対。不可能といわれたプロジェクトはいかにして成し遂げられたのか。そして、なぜ今、人々に愛されるようになったのか。エッフェル塔とパリの人々の愛をめぐる100年の物語を紹介していました。フランス革命100周年に当たる1889年にパリで開催された万国博覧会のため、ギュスターヴ・エッフェルによって建てられた312.3mの世界一の建造物で、国の威信を示す展望塔でした。私たちは、「1964東京五輪」の６年前に完成した東京タワーと、主にその高さと機能のみの優劣で比較しがちでしたが、時代進展（特に建築技術の進化）を考慮すると、当時のフランスの科学技術や文化の粋を集めた建造物であったことに驚きを隠せませんでした。そんなエッフェル塔も、ナチスドイツの占領下のパリで市民が一斉蜂起したことを知ったヒトラー総統は、フランスのシンボル的なパリ市内のたたずまいや目障りとも思えたエッフェル塔を含め、全破壊を命じたことがありました。その際「パリは燃えているか！」と催促の意を込めてドイツ領内から叫んだと伝えられています。その後の戦歴はご承知の通りで、壊滅的破壊の危機から逃れたパリは、2024年の今まさにオリンピアンの活躍で「パリは燃えている！」のです。

公認会計士　黒　沼　　憲